

静岡文化芸術大学

SUAC 多文化プロジェクト 特別講演会

# ブラジルの日本語メディア から見た日系人社会

## 報告書

日時：2013年10月11日（金）15:00～17:00

場所：静岡文化芸術大学 南281中講義室

主催：静岡文化芸術大学

講師：深沢正雪氏（ニッケイ新聞編集長）

編集

池上重弘

2014年2月

この講演会は、2013年度静岡文化芸術大学イベント・シンポジウム開催費「お芝居出前プロジェクト 寄せ書き展示」及び「はままつ多文化共生 MONTH 事業」の一部として行われました。

## 目次

### SUAC 多文化プロジェクト 特別講演会

#### ブラジルの日本語メディアから見た日系人社会

目次	・・・ i
1 はじめに 池上重弘（静岡文化芸術大学教授）	・・・ ii
2 主催者挨拶 池上重弘（静岡文化芸術大学教授）	・・・ 1
3 特別講演 深沢正雪（ニッケイ新聞編集長）	・・・ 2
4 資料 チラシ	・・・ 25
関連新聞記事	・・・ 26

## はじめに

池上重弘（静岡文化芸術大学教授）

この冊子は2013年10月11日（金）に静岡文化芸術大学で開催された特別講演会「ブラジルの日本語メディアから見た日系人社会」の全貌を記録したものである。この特別講演会は、2013年度静岡文化芸術大学イベント・シンポジウム開催費「お芝居出前プロジェクト 寄せ書き展示」及び「はままつ多文化共生 MONTH 事業」の一部として開催されたわけだが、これら2つの事業と本講演会の関係について、ここでは簡単に記したい。

2011年度と2012年度の2年間にまたがって、静岡文化芸術大学文化・芸術研究センター長特別研究として「多文化共生社会の実現に向けた交流支援と学習支援のあり方をめぐる実践的研究」（研究代表者：池上重弘）を実施した。その一環として日本・ブラジル両国でお芝居出前プロジェクトを実施したが、その来場者が書いた寄せ書きを本学西ギャラリーで展示し、日伯の市民レベルの相互理解を深めるために行ったのが「お芝居出前プロジェクト 寄せ書き展示」というイベントであった。2013年10月11日から20日にかけて開催されたその展示会に合わせて2つの関連イベントを企画した。ひとつがこの特別講演会（10月11日）であり、もうひとつは2年間の特別研究の成果を総括するシンポジウム（10月12日）であった。

この特別講演会で講師を務めてくださった深沢正雪氏は、お芝居出前プロジェクトのブラジル側のカウンターパートであったニッケイ新聞（ブラジルで発行されている邦字新聞）の編集長であり、10月12日のシンポジウムにおいては、ブラジル側から見たお芝居出前プロジェクトの意義と今回の寄せ書き展示が日伯両国の相互理解にもたらす効果についてもコメントしてくれた。

浜松市では2013年に「多文化共生都市ビジョン」を策定し、エスニックな多様性を都市の活力として生かす方向性を提示した。その流れの中で10月を多文化共生 MONTH と定め、多文化共生関連のイベントを集中的に開催し、広報の一元化等により、多文化共生の意識啓発の促進を図った。本学でも上記の展示会と特別講演会、そしてシンポジウムの3つを「SUAC 多文化プロジェクト」の名の下にまとめて「はままつ多文化 MONTH 事業」に申請した。以上がこの特別講演会の位置づけである。

日本からブラジルへの移民を多く輩出した地域というと、沖縄や九州などがすぐに思い浮かぶが、実は静岡県からもブラジルへ渡った移民がいる。ご自身が静岡県沼津市の出身である深沢氏は今回、注目されることの少ない静岡県からのブラジル移民に焦点をあてて紹介してくださった。また、外国に暮らす日系人が日本と外国の架け橋としてどのような役割を担っているかについても興味深い洞察を展開された。では、貴重な講演に耳を傾けてみよう。

司会者（池上） 特別講演会『ブラジルの日本語メディアから見た日系人社会』ということで、遠く地球の反対側ブラジルのサンパウロからニッケイ新聞編集長の深沢正雪さんにお越しいただきました。これから2時間の講演会を行いたいと思います。私は静岡文化芸術大学教授の池上重弘です。元々はインドネシアをフィールドとした文化人類学の研究をしていましたが、1996年に浜松で職を得てから地域の国際化の問題、多文化共生の課題について研究を始めて、今は研究・教育のほとんどが多文化共生の問題になってきました。

深沢さんとの出会いは2008年。ちょうど移民100年の年に本学も100周年を記念する写真展を行いました。その写真展の関係でブラジルから写真をいただいたり、あるいは私自身がブラジルに住む日系人の写真を撮ったりするため、2008年5月に初めてブラジルを訪問しましたが、その時が深沢さんとの初対面でした。

次の出会いは2011年の夏。この時は、お芝居デリバリーまりまりという人たちとブラジルに渡りました。10日間ほどでしたがブラジルでお芝居をいろんな人たちに観てもらおうプレ公演をしました。3度目が2012年の夏。4週間、ブラジル・サンパウロ州内を回ってお芝居を観てもらいました。お芝居を観てもらおうこのプロジェクトは、観た人たちの寄せ書きを日本に持ってきて展示しようという研究活動の一環です。その展示はちょうど今日（2013年10月11日）から始まった『届け！お芝居デリバリーと私たちの思い』という展示プロジェクトで、本学の西ギャラリーで行っています。このプロジェクトは20人近い学生実行委員会によって行われていますが、そのリーダーを含め6人が本学に在籍する日系ブラジル人の学生です。この国で育ってこの国で教育を受けた子どもたちが本学にも入るようになってきて、学生たちが日本とブラジルをつなぐプロジェクトの中核を担うようになってきました。数年前にはありえなかったこのような状況が、今この国で、この町で、始まっています。

浜松市は今年2013年、多文化共生都市ビジョンを策定しました。これまでの支援の対象、助けてあげる対象としての日系人・ブラジル人というだけでなく、文化の多様性を生み出す活力の源として捉えていきたいと思いますと発想の転換をしたんです。その一環として10月を多文化共生MONTHとして定めて、いろんなイベントをなるべくそこに集中させてやっつけようことになりました。それによって市民の多文化共生の意識を高めていこうという意図です。私たちの大学はそれのためにというわけではありませんが、たまたま10月に多文化共生関連のイベントをいくつかやろうと思ったところ、ちょうど10月が多文化共生MONTHということで、いくつものイベントを集中して行うことにしました。

今日10月11日から20日までの展示イベントと合わせて初日の今日、ブラジルから深沢さんをお招きして講演会を開催することができました。深沢さんは、1965年に静岡県沼津市で生まれた日本人の方です。現在ブラジル・サンパウロ州在住。92年にブラジルに初渡航して、現地で発行されている日本語新聞（パウリスタ新聞）で研修記者をなさいました。95年に一旦帰国して群馬県大泉町——これも浜松と並んでよく知られたブラジル人の集住地域ですが——ここでブラジル人と共に工場労働を体験して、その知見をまとめたノンフィクション『パラレルワールド』という本を出版されました。これが99年の潮ノンフィクション賞を受賞しました。私も深沢さんと知り合う前に読んで、非常に面白いドキュメンタリーだと思ったのを記憶しております。ほかにも著書など多数あります。1999年からまたブラジルに渡り、2001年にニッケイ新聞に勤務。2004年から編集長をなさっています。静岡新聞をとっている方は一月半くらいに1回、深沢さん

の写真が出た「時評」という欄に鋭い分析を書かれているのをお読みになったこともあるかもしれませんが。

リーマンショックの後に国の帰国支援を受けて帰国した人たちがいました。その人たちにはその後3年間を目処に、日系人としての地位に基づくビザではブラジルから日本に来れませんよという縛りがあったんですけども、10月15日にそれが解禁されるという情報が出ています。一方そこには1年間の雇用契約を証明する書類が必要だということも書いてあります。ブラジルの日系コミュニティはどう反応するだろうか。たくさんの人がまたこぞってやってくるのか、やはり1年間の雇用契約の縛りはなかなか難しくて実際は来ることはできないだろうか。あるいは、この間、日系社会の中で帰国支援の制限をめぐってどんな動きがあったのか、あるいは、なかったのか、この点を是非お話くださいと、私から深沢さんをお願いしてあります。本日はたくさんの方々のマスメディアの方々に越えさせていただきます。新聞各紙とNHKさんのテレビカメラが入っております。

それでは本日の講師をご紹介します。ニッケイ新聞編集長の深沢正雪さんです。

### ●邦字紙からみた見た日系社会

深沢 ブラジルのサンパウロ州サンパウロ市で日本語新聞——『邦字紙』と我々は言っています——の「ニッケイ新聞」編集長の深沢正雪です。公称一万部の、いわゆるコミュニティーペーパーです。ブラジル全国は日本の23倍くらい面積がありますが、全ての地域に新聞を翌日に一応配ります。サンパウロ新聞というもうひとつの日刊新聞があって、2つでブラジルの日系社会に日本の情報を伝えています。私の前任者が吉田尚則といますが、彼がいつも「移住というのは壮大な民族的な実験である」と言っていました。私は最初、何を大げさなという感じで、全くピンと来なかったんですけど、そのうちに、今ブラジルで18年目くらいになりますが、なるほどと思うことがいろいろ出てきました。そんな、住んでいるうちに感じたこととか、住んでいるうちにこんな気がしてきたぞ、という話をさせていただければと思います。

1947年1月にパウリスタ新聞、1949年に日伯毎日新聞ができて、それが1980年代から読者の高齢化と出稼ぎ現象によって読者が減り、98年3月に合併してニッケイ新聞になったというのが大まかな歴史です。合併以前に51年、合併後から15周年というところです。われわれと同じ邦字紙は、世界に大体30紙以上あります。例えば、北米は北米報知とか、パシフィックプレスはハワイの新聞ですね。アルゼンチンにはラプラタ報知があります。そのような邦字紙から見た日系社会ということではしゃべります。



図1=南米の地図で見る極東・日本

日本の地図で見ると、南米は右下の端っこにあり、広い太平洋をはさんで一番遠い場所のイメージでしょう【図1】。立場を入れかえて、南米の地図から日本を見ると、大西洋をはさんで一番右上、つまり東の端、まさに「極東」なんですね。この地図で日常的に世界を意識している人たちからすると、日本もまた文句なしに「一番遠い国」というイメージです。



写真 1=ラジオ体操

### ●ブラジルの中の日本

その「遠い」ところで日系人は何をしているのかですが、このビデオを見てください。これはサンパウロ市セントロ区にある通称“東洋街”リベルダーデ広場の朝6時の光景です。いま地下鉄の駅を出てリベルダーデ広場に出てきたところです。あのような白いユニフォームを着た人たちが広場に集まって（ラジオ体操を）毎朝やっています【写真1】。最近はブラジル人の方も混じってやるようになって、支部の中にはブラジル人だけの支部もあるという状態です。ブラジルラジオ体操連盟という団体があっ

て、これが今年35周年の式典をしました。

これが日系活動というか日系団体の活動の一環です。そのような東洋街の様子を少しみていただきましょう。ラジオ体操の人たちの後ろに、赤と白の3角形の建物がありますよね。作った人たちは「日本のお城」風だと言っていますが、これは「ブラデスコ」という、れっきとしたブラジルの銀行です。東洋街の広場にあるというので東洋風にしなきゃいけないんじゃないかと、わざわざお城の外観をした銀行を作りました。カタカナの店名とか出てます。「ロケキチ」って、変なカタカナが出てます。ラッキーキャットがなぜかロケキチになっている。全くこの意味不明な日本語の乱れ方が面白いですね。毎週日曜日にこの広場で開かれる東洋市で、たとえばお守りを売っている神主がいたりとか、近くには理髪店もあってそこで邦字紙を読みながら自分の番を待つという、どこかの日本の地方都市みたいな光景が、ブラジルの一角にあります。

ブラジルの日系社会のイメージですが、大体人数としては150万人とされています。うち、何らかの形で先ほどのラジオ体操のようなものとかカラオケとか、県人会とか——静岡県人会もあります——日系活動に参加している人が50万人くらい。その中の大体一世の方、つまり日本国籍者が6万人を切ったところです。バイリンガルの、日本語もある程度話せるという二世の方がおそらく15万人くらいいるんじゃないかと推測しています。ポルトガル語が中心の二世、三世だが、日系活動に一生懸命参加している方もかなりたくさんいて、おそらく30万くらいいるんじゃないかと、合計50万くらいだと思います。

図の灰色の部分でブラジルでは「コロニア」と言います【図2】。英語の「コロニー」に近いものですが、積極的に日系活動に参加する人たちがコロニア。あまり日系人の中には日系意識を持ってない人、ほぼ持っていない人が多いのですが、それが100万人くらいいると思います。コロニアの50万人とそれを合わせて150万人です。ブラジルの日系人は世界で見たらどれくらいかといえば、実は世界で1位です。世界で260万人日系人がいると言われてますが、ブラジルが1番の150万で、次がアメリカで、実は3番目が日本なんです。アルゼンチンやペルーなどよりはるかに日本の方が多い。日本が3番目の一大拠点

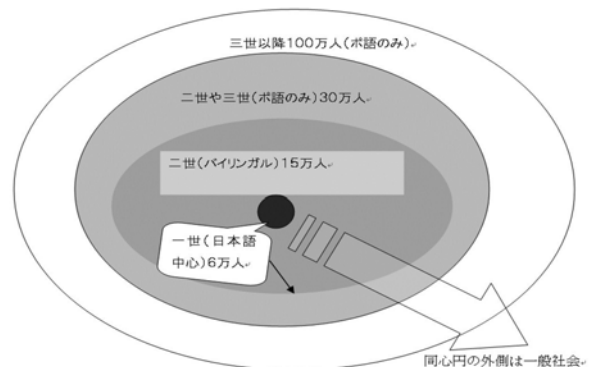


図 2=ブラジル日系社会のイメージ図

になっている。日系人の側から見るとそう見えます。

### ●北米、南米への移住の歴史

来場者のみなさんに一つ質問ですが、日本を除いてどういう地域に日系人が多いでしょうか。

共通点は新大陸なんです。北米、南米が中心です。なぜアメリカ大陸かというのは、人口が過密になったアジアやヨーロッパ——主にヨーロッパを「旧大陸」と言っていますが——旧大陸から人口が希薄だったアメリカ大陸に大移動したのが18、19、20世紀の人口移動の大波でした。日本人もこの波の最後の部分に乗ってブラジルに来ました。

日本の中でも「静岡と海外移住」といえば、やはり山田長政だと思います。さらに「静岡とブラジル移民」という意味では、佐久間貞一でないかと思います。沼津兵学校を出て吉佐移民会社という最初の移民会社を設立して「土佐丸事件」に巻き込まれました。「土佐丸事件」というのは、“幻”の最初のブラジル移民船でした。今では最初のブラジル移民船といえば「笠戸丸」といわれますが、土佐丸は1897年で、もしこれが成功していれば、最初の移民船はこれでした。でも結局、失敗してしまいました。ブラジルで海外就労するために人を集めて神戸港に移住者たちがみんな集まっていたんですが、出発10日前になって突然ブラジルからキャンセルの電報が入って行けなくなったのです。当時のお金で30万円という巨額な損害を移民会社はこうむりました。現在の3億円余に相当します。日本の外務省からすると、ブラジルは「けしからん国だ」ということでブラジル行きが当分なくなった。

そんなわけで、1899年に先にペルー移民が始まりました。そのころのブラジルはどういう国だったかというのと、1888年に奴隷制がようやく廃止され、翌年に共和制になりました。つまり、1889年までは王様が支配していた帝国でした。そこのコーヒー農園に外国移民が入っていきましたが、事実上、奴隷の代わりの状態でした。奴隷が禁止され、その代わりに外国移民が入ったわけです。その扱いがひどいというので、当時いっぱい入ってきたイタリア移民が本国政府に訴えました。本国政府としては「ブラジルはけしからん」となり、ブラジル行きの渡航費補助をなくしました。するとブラジル側の農場主は困ってしまい、「誰かいないか」という時に、たまたま水野龍がブラジルに「日本移民を入れないか」と売り込みに来ました。それで「じゃあ、試しに入れてみよう」という話になりました。

当時は1905年前後、日露戦争の時代です。アメリカでは黄禍論が出て日本人排斥の機運が高まったときで、米国政府は1907年に日米紳士協定を結んで、日本が自主的に渡米移民を制限するように仕向けたんです。日本の国内が日露戦争の復員兵で溢れる状態になって、米国に代わる新しい移民の送り出し先を懸命に探していたというときに、水野龍が出てきます。彼が第1回移民船「笠戸丸」を運行させた皇国殖産会社の社長です。

ここからブラジル移民という話がようやく出てきます。「よりよい生活を求めて」、もしくは「生き残りを求めて」国民が国境を越えて移動するのが移住だと思います。これが1800年前後から起きているグローバリゼーションと言われるような動きの一部だと思います。言い方をかえれば、「労働力の需給関係の世界的な調整」じゃないかと思います。労働者が集団で国境を越えて移動した結果、彼らが持っていた文化とか言語も移植され、それが移住先にも影響を与えます。そんな文化の世界的な相互浸透が、結果的に起こるのが、移住の現象の基本だと思います。

国境を越える労働者に対して、国家としてはパスポートとか、ビザという制度を作って出入国を管理するようになりました。国内に入った外国人労働者＝移民には「移民法」という法的な枠組みを作って、彼らの立場を明らかにし、従来からの国民国家を守るように試行錯誤してきたのです。移民という外国人たちは、元々その国の人＝国民ではないものですから、国民国家の周辺部分というか、ぎりぎりのところにいる人たちです。だから移民という存在自身がつねにアナーキーっぽい部分を持っています。

そんな20世紀前半の移住の波に乗って、ブラジルまで来た日本人が25万人もいました。私の生まれた沼津市の人口は20万くらいだから、それより多い人口がブラジルに渡りました。ですが、それだけの人口が渡ったにもかかわらず、日本の歴史の教科書にはほとんど書いてないという話を聞いて、非常に残念だと思います。

### ●「通訳五人男」の一人、平野運平

最初の移民船は笠戸丸でした。笠戸丸で送られた移住者を通訳したのが「通訳五人男」で、そのうちの一人が平野運平という、掛川の方です。この方について、松尾良一さん（元浜松市職員）が『読本 ブラジル移民の父平野運平』という本を出版されました。これは平野運平の写真ですが、20代半ばでブラジルに渡って300家族以上の日本人、200万本のコーヒーを管理して移民の監督をしました。立派な方だったようです【写真2】。雇われ労働者では搾取されるばかりで、いつまで経ってもお金が貯まらない、それでは錦衣帰郷ができません。それなら独立農になろう、自分で土地を買ってその土地に入ろうという考えが生じて、ノロエステ鉄道のカフェーランジアというところにある約4千ヘクタールの土地を買って、賛同者に分譲し、1915年に理想の日本人植民地「平野植民地」というのを始めました。

しかし、その年の12月までに82家族が平野植民地に入っていったんですが、バタバタとマラリアで倒れて年末までになんと80人がなくなりました。毎日葬儀をして棺桶にする木材もないという悲惨な状況でした。当時マラリアという病気自体が日本では全く知られていなかった。移民たちは、とりあえずお米を作りたいかったんです。それで自然と川のそばに土地を買って、結果的にマラリアにやられるという傾向がありました。これが一つの教訓となって、以後は川から離れたところに住むようになりました。これが平野運平の墓です【写真3】。



写真2=平野運平



写真3=平野運平の墓



### ●野球を伝えた笠原憲次

平野の植民地が開かれた1915年と同じ年に、笠原憲次という、駿東郡静浦村の方がブラジルに渡りました。彼は慶応大学で本格的なベースボールを学んでブラジルに本格的な野球を持ち込んだ第一人者です。ちなみに今年（2013年）3月2日、ワールドベースボール・クラシックの日本代表の初戦の相手が、ブラジル代表でした。最初はブラジルが先制して、日本が8回に3点入れて逆転し、最後はブラジルが負けました。ここまでブラジル代表がそれなりの野球をするようになってきた背景には、最初の時点で静岡県人がそういう貢献をしてきたということも知っていただきたいと思います。

彼は1915年に、移民船ではなく、ヨーロッパ経由で独自に渡った自由渡航者です。最初はサンパウロ市でアメリカ人が作っていた野球チームに入って、ピッチャーをやっていたそうです。そのあと1920年に、サンパウロ市で日本人初の本格的な野球チーム「ミカド運動倶楽部」を結成し、1923年にレジストロ植民地に行ってスポーツを青年たちに教えました。そのレジストロ植民地は3つの植民地から成っていて、そのひとつが桂植民地です【図3】。



図3=レジストロの地図

### ●植民地（コロニア）の栄枯盛衰

桂というのは桂太郎の『桂』です。日英同盟や日露戦争のときの首相です。その桂太郎が後押しして、ブラジルに植民地を作っていました。それがちょうど100年前で、レジストロ地方では入植百周年記念式典を今月末（2013年10月）にやる予定です。レジストロの場所ですが、サンパウロ市から南に190キロぐらい。桂植民地、レジストロ植民地、セッテ・バーラス植民地を合わせて「イグアッペ植民地」と総称します。これを作ったのは青柳郁太郎という方で現地交渉人として派遣され、

桂太郎ら当時の明治の政財界の後押しを受けて、サンパウロ州政府から無償で土地譲渡を受けました。その土地の広さが大体14平方キロ。沼津市の約8%（に相当する土地）をタダでもらったわけです。

桂植民地があったところは今年（2013年）3月に行ったら何も残っていませんでした。日本人はもう誰も住んでない場所で、「つわものたちが夢の後」という感じです。その桂植民地からリベイラ川を20キロくらい上がったところにレジストロという植民地を作ったんですが、そこでは州政府から5万町歩をもらいました。5万町歩というのは5万ヘクタールですから沼津市の3倍ぐらい。浜松の3分の1ぐらいの面積をもらいました。そのレジストロの現在の風景ですが、どこか見覚えのあるような風景じゃないでしょうか？【写真4】私は沼津出身なので香貫山の方へ行くと、このような風景が今も延々とありますが、これは全部茶畑



写真4=レジストロのお茶畑

なんです。レジストロは現在5万5千人の町に発展しました。日本人が始めた町。そこにブラジルの労働者がいっぱい入って行って街づくりをして現在、ブラジル人と日系人が一緒になった街づくりの取り組みをしているところです。

### ●『南米移住と静岡県人』に描かれた県民移住の背景

静岡県人の南米移住に関して、山内正次さんが書いたすばらしい本『南米移住と静岡県人』があります。この本からいろいろ教えてもらいました。第一次世界大戦中は県内でも浜松地域の綿織物、製紙など各種産業に好景気が訪れましたが、敗戦後、品不足により物価が急騰。1918年には米価が上昇を始め、全国的な米騒動に発展した。1923年には関東大震災。震源地が小田原沖。県の東部が主に被災しました。県内の死者・行方不明者が444人。消失・流失などを含めた住宅被害は9259棟に上ったとあります。

大正から昭和初期にかけての静岡県は「数々の災害に見舞われたことが海外移住を後押しした」とこの本にあります。静岡だけでなく、このように日本国内の生活が苦しくなって海外に活路を見出そうとした人が激増しました。そんな1924年にアメリカは排日移民法を可決して、日本人移民を完全にシャットアウトします。それまではみんなアメリカに行こうとしていましたが、その代わりに行くところを探し始めたのがブラジルです。そんな震災翌年から「震災移民」として内務省が渡航費補助金を出して、移住の国策化が図られました。

1927年は静岡県でも県海外協会というのができています。静岡県海外植民講習所が県立磐田農業高等学校の前身です。1929年から7年間、毎年冬の農閑期に海外に行くための講座を開講して、卒業生の3分の1がブラジル、南洋、満州へ移住しました。それに対し、ブラジル側は「県人会」を作って受け入れのための体制を整備しました。その静岡県人会の前身が1930年に松本圭一（焼津出身）、平井格次（榛原郡の出身）によって作られました。当時、移住者たちはブラジルで、言葉や文化、習慣が違うという中で、非常に困難な生活を強いられていました。ですから、お互いに助け合うための組織、親睦をする組織として県人会を始めました。

### ●クリーニング業の父、平井格次

この平井格次は1928年にブラジルに渡りました。その前は東京の京橋で旅館を経営していたそうです。でも関東大震災でやられて、東京にいてもしょうがないと決心してブラジルに渡りました。1930年にはサンパウロ市でクリーニング業を開業して、1938年に日本人の洗染業組合を組織して会長に就任した先駆者として知られます。この組合が戦中、戦後にサンパウロ市に集まってくる日系人をどんどん吸収する形で増えていって、サンパウロ市のクリーニング業を営む日系人が一時期2000軒、3000軒というくらい多い時期を生みました。この日本人洗染業組合が後押しし、戦後、連邦下院議会に日系人初の国会議員、田村幸重を送り込みました。平井は困っている人への面倒見がよく、「清水の次郎長親分」のような感じだったそうです。

### ●労働運動の立役者、松本圭一

さて、もう一人の県人会創立者・松本圭一は変わった方で、東京帝大の農学部卒移民です。1921年4月にジュネーブで開かれた第3回国際労働会議（現在の国際労働機関ILO）に「労働者代表」として出席し、その後の人生を大きく変えました。日本政府代表と日本の雇用主代表、日本の労働者代表



図4＝静岡県人移住者の市町村分布図

の三者が招かれて、その会議で議論をしましたが、誰も労働者代表をやりたくなかったらしいんです。政府や企業代表と公の場でやり合うわけですから、仕事先を考えれば当然ですよ。

第2回のおきまでは国側で労働者代表を選んで、国にいいような主張をその場でさせていた。当時大正デモクラシーの時代ですから労働組合運動が非常に盛んになり始めました。1918年に労働組合が107団体しかなかった中で、5年後の1923年には432団体。5年間で4倍になる。組合が盛り上がったとき

に「官選の労働者代表はいかがなものか」と踏み込んで盛り上がり、「民間側の人間が行かなければ」となった。でも、そこで労働者代表として行ったら、日本政府側や雇主側と話が対立することは目に見えている、と誰も行きたくなかったわけです。自分個人の生活を考えたら、国や大企業ににらまれたくないと思うのも当然ですよ。

そういう中で、松本圭一が「自分がやらなければ誰かが犠牲になる」という信念で引き受けたわけです。松本圭一が国際会議で主張したのは「小作人の労働者としての権利」。当時の日本では、小作人に労働者としての権利が認められてなかったのです。しかも国際会議では松本圭一の主張が認められて、日本政府代表は怒り心頭となり、松本への風当たりは強かった。ほとぼりを冷ますような意味もあって、ゆっくり一年ぐらいかけて海外を回って日本に帰ってくるのですが、結局、松本は仕事を干されます。

そんな時に、北米、南米を視察してブラジル移住を決意しました。1926年に渡って、1930年から静岡県人会を創立して移住者受け入れのために力を尽くしたわけです。以来、25年間会長を務め、後からくる静岡県人のために尽くしました。1930年は昭和恐慌の悪影響で、県内でも製紙とか紡績とか、産業が非常に影響を受けて、米や野菜、みかんなども価額が下落しました。加えて、当時の農家の40%が兼業してきた養蚕の価格も半分以下になるような大暴落の時代でした。

### ● 1930年代は「移民の団塊の世代」

そんな流れの中で、移民が開始した1908年から、太平洋戦争が始まるまでの33年間に4049人の静岡県人が移住します。中でも1932年～1937年の間にその半分の2010人がブラジルに渡っています。戦前、戦後も含めると静岡県人は全部で4881人も渡っていますが、この5年間で全体の41%を占めています。一種の「移民の団塊の世代」じゃないかと思います。

戦前静岡からの移民が多かった地区というのは、ここにある通りです【図4】。かなりまんべんなく移住されたようですね。静岡市も浜松市も多く移住されています。1924年から移民の国策化が始まって一気に数が増えています。静岡県人だけでなく日本全体からブラジルへ渡った時代です。そこから1934年にブラジルで二分制限法という形で、過去50年間の2%しか移住者を入れないという法律ができて、日本移民を事実上締め出す法律が施行されました。

有名な評論家の大宅壮一は、1954年にブラジル取材旅行に来たときにサンパウロで講演して、「明治・大正を見たければ、ブラジルに観光旅行するがよい」という名言を残しました。大宅壮一からすると日系社会の中には、明治の古臭い日本人の気風が残っているというわけです。日本国内では終戦という大ナタがふられて、明治の日本人の精神は断ち切られたが、直接戦場にならなかったブラジルではそ

ういう気風が残り続けたと考えたようです。先ほどの「移民の団塊の世代」が頭に浮かびます。1926年に30歳で家長として渡った人は、1896年（日清戦争のころ）に生まれたわけです。それから日露戦争のころにかけて10代を過ごして、明治後半のナショナリズムがだんだん強まって行く中で人格形成していった世代なわけです。その人たちがブラジルに渡って、その明治の精神を日系社会でさらに純粋化させたから、大宅壮一がというような気風が生まれたのかと思います。

### ●アマゾンのスーパーマーケット王、山田義雄

山田義雄さんは沼津市出身ですが1931年にアマゾンに行きました。山田さんは1915年に沼津商業を卒業して中央大学商科に進学しましたが中退しました。沼津に戻って果物商を始め、台湾バナナの移動販売で成功するなどしました。その後31年に移住しました。息子の純一郎さんも沼津生まれで、戦後にパラ日系商工会議所を創立されました。現在では孫世代の山田フェルナンドさんが、山田商会の事実上の経営者です。山田さんは「Y・YAMADA」（イプシロン・ヤマダと読む）というスーパーを1950年にパラ州都ベレン（アマゾン河口最大の町）で始めて、現在そのスーパーが35店舗で年間の総売上は日本円にすれば600億円以上じゃないかと思います。「北伯」と僕らは呼びますが、アマゾン地方で最大のスーパーマーケット網を経営する方です【写真5】。ブラジル全体でもスーパーマーケットチェーンの中で10位以内に入るところで、今年フェルナンドさんはブラジル・スーパーマーケット協会の会長もされています。そのような静岡県人子孫がアマゾン地方にもいるということです。



写真5=アマゾンのスーパーマーケット王  
山田義雄

### ●敗戦後の日系人を勇気づけた「フジヤマのとびうお」古橋広之進

日本は1945年8月に敗戦しましたが、ブラジルでは日本が負けたことが信じられない人たちがいました。日系社会の中で日本の敗戦を認めたくない人たちが「勝ち組」になって、早々に日本は負けたと認識した人たち「負け組」と対立して、1946年、終戦翌年に殺人事件までおきました。そんな殺伐とした時に、1950年に日本から古橋広之進（浜松市出身）の「フジヤマのとびうお」一行がブラジルに来てくれました。サンパウロ各地で水泳大会を行って、母国の敗戦で精神的に落ち込んでいた日系社会を強く励ましてくれました。

### ●数奇な人生を歩んだ政治家、山崎劔二

その頃、山崎劔二という御殿場出身の戦後移民もブラジルに来ました。日本人が一番多いサンパウロ州を中心に勝ち負け抗争が起きて、20人前後の死者が出たため、ブラジル政府としてサンパウロ州に日本移民をこれ以上入れたくないということになりました。それでサンパウロ州に戦後、一時的に日本移民は入れなかったのです。その時どこにいったかといえば、人の足りないアマゾン地域です。だから山崎劔二は最初にアマゾンに入っています。

彼は御殿場生まれで1931年に沼津市議に当選、1937年に労農党・社会大衆党などの左派議員として衆議院選に出馬しトップ当選しました。35歳にして政治家の階段を上りつめ、岡山出身の藤原美智子と結婚しました。ところが当時大政翼賛会の締め付けがだんだん厳しくなって、政治家として活動できなくなったため、1942年に妻子を残して焼津の漁船に乗り込んで単身ボルネオに密航し、日本軍からケニンガウ県知事に任命されました。左派議員から軍の協力者へ、という路線転向をしたわけです。通訳とたった2人で現地入りして、待ち構えた現地の住民の方を非常に驚かせ、現地で親しまれて名知事して知られました。そして現地人のアインさんと出会って、彼女を現地妻として子どもが2人生まれます。

1946年に山崎はアインさんと子ども2人を連れて静岡に帰ってきました。戦後初めて女性が参政権を得て選挙に出られるようになった選挙の1週間前に、突然引き上げてきたのです。社会党としては本来、山崎に選挙に出てほしかったんですが、いつ帰ってくるか分からないということで、妻の美智子が代役に立ち、見事当選しました。劔二は次の選挙では自分で立ちたかったのですが、子どもを連れて別の奥さん（アインさん）を連れて帰ってきたということで「二人妻事件」と呼ばれ、マスコミを賑わしてしまいます。『南十字星は偽らず』という著書も山崎劔二が自分で書いて、アインさんの名前で出しました。当時、高嶺秀子がアイン役で主演して東宝で映画まで作られました。結局、政治家の道をあきらめた山崎は、アインさんと共にボルネオで生まれた子ども、沼津で生まれた子どもを連れて1954年にアマゾンに移住しました。

このアマゾンに入った時に、呼び寄せてくれたのが山田義雄。先ほどの「Y・YAMADA」の初代です。そんなやり手経営者の持っている農場に支配人として入りましたが、山田さんとの考え方のもつれが起きました。片や労働者の権利を一生懸命主張する社会主義者、片や経営者としてのやり手の方ということで話が合わなかったと思います。8カ月で決裂して山崎はサンパウロ市に出ました。1958年、渡伯4年目に山崎劔二はサンパウロ市の旧「日本病院」（今のサンタクルス病院）で肝臓癌でなくなりました。日本で騒がれた有名人でしたが、ブラジルでは火が消えたようにひっそりとなくなりました。その詳しい顛末が、『波瀾の南十字星 山崎劔二の一生』（岩田サヤカ著、三一書房、1994年）という素晴らしい本に書かれています。（著者の岩田さんは）小山町に住んでいらっしゃる方で、非常に面白い本ですので、ぜひ手に取ってみてください。

#### ●戦後の技術移民を輩出した南米産業開発青年隊

そのほか、静岡県にゆかりのある移住組織としては「南米産業開発青年隊」というのもありました。建設省が富士宮市に「建設大学校中央訓練所」というのを作って、そこで訓練を受けた人たちをブラジルに送り出す組織でした。農家の次男、三男を国土開発の建設技術者に育てるために作られた学校です。富士山のふもとにあり、当時はまだ開拓地のようなところでした。326人の卒業生がブラジルに渡りましたが、うち10期生以降の55人がこの訓練所で訓練を受けています。この訓練所は今でもあって、今は建設省ではないですが「富士教育訓練センター」となって、やはり土木関係の研修所として使われています。



写真 6=レジストロの鳥居

さて、ブラジル最大のイタイプーダムというのがあります。4～5年前までは世界最大のダムで、今は中国に世界最大の座を奪われましたが、ブラジルの産業界を支えるダムです。このダムが止まると人口2000万人の大都会サンパウロの電気も止まります。4～5年前に1回大停電になって、その日はうちの新聞も出なかったという苦い記憶があります。サンパウロからイタイプーまで2000キロくらいありますが、壮大な送電線を張ってサンパウロに届けています。どれだけデカイダムかというと、ダムの本体の高さは1番高いところで196メートルもあります。浜松アクトタワーが190メートル

ちょっとなので、あの高さのコンクリートの壁が8キロも延々と続くわけです。

それで、当時建築に関わった人たちが工期を間に合わせないといけなかったんですが、ダムを作るために膨大な国債を発行してその利子の支払いとか、遅れたら大変なことになるんですよ。1978年、イタイプーダム建設計画が大幅に遅れたときに、助っ人として大活躍した「8人のサムライ、「イタイプーのスワット」と呼ばれた日本人たちがいました。彼らは、富士宮の同訓練所卒の袋崎雄一（ふくろざき ゆういち、10期）を始め、荒木昭次郎や黒木喜八郎と安摩勉らがいました。2000年を超えてから世界経済の表舞台に躍り出ることになるブラジルですが、その発展の陰には、静岡で訓練を受けてインフラ整備に尽力したこのような技術移民の姿がありました。

ほかにも静岡県からの移住に関しては、ヤオハン店員移住もありました。1970年に5人、翌年13人、サンパウロにヤオハンの店を作るということで移住した方もいました。でも撤退になりました。

### ●レジストロで出会った「日本」

さて、この映像を見てください。これは「原爆を許すまじ」という曲で、この場所レジストロは5万人くらいの田舎町ですが、今年入植100周年を迎え、日本人とブラジル人が一緒になって作ってきた町です。8月の終戦記念日のとき、地元日系人が主催してレジストロの公立学校の生徒300人にこの日本語の歌を歌ってもらって、平和記念式典みたいなものを独自にやりました。この式典をやる前に、長崎の原爆を描いたアニメ『アンゼラスの鐘』というのにポルトガル語の字幕を付けたものを上映して、原爆とはなにかというようなことを生徒たちに勉強してもらい、歌を事前に練習しておいて、式典でみんなに歌ってもらうという形でセレモニーをやりました。ブラジル人の市長が、自分で平和宣言を考えてポルトガル語で読み上げてくれました。日系人がいるから独自の平和運動がこのように展開されているわけです。

これも見てください。不思議な光景じゃないでしょうか。鳥居の奥に見えるのは、カトリック教会です【写真6】。鳥居の向こうにあるのは、普通は神社ですよ。べつに、わざとそのように配置したわけではありません。たまたまそうなったらしいです。ちなみに、丘の上のあの教会もその昔に日系人が作ったものなんです。日本とブラジルの文化が混ざっている場所として、ひとつの象徴的な風景であると思います。歴史と文化が融合しているひとつの風景だなど、レジストロに行くたびに不思議な感覚に襲われるというか、そういう光景です。



写真 7=レジストロの灯籠流し

あと、この町では毎年11月に灯籠流しをやります。鳥居のところに電気が付いているのがちょっと妙なんですけど、鳥居の横に流れているリベイラ川のところに小さな点々があります【写真7】。あれが灯籠です。来るのは、ほとんど地元のブラジル人の方々です。レジストロ最大のお祭りです。日本人が作った町で行われる最大のお祭りが、日系団体が主催するこのような日本的な行事。そんな姿が非常に美しいなあと思います。鳥居の袂にブラジル人の若いカップルがいて、いいなあと思って、写真撮ってましたら、花火見ながら、こういう風になるんですね（ブラジル人のカップル

ルが鳥居の下でキスをする写真）。

こういう町で生まれ育ったブラジル人の方というのは親日家になるんですね。小さいときから日本の文化やそういうものに親しんで生まれ育ったわけですから。これは日系人が毎年そのような活動を続けていると、そういうブラジル人がいっぱい育っていくんだと思います。このレジストロの奉納相撲の一コマですけど、腕に何か書いてあります（ブラジル人力士の腕に「交通安全」の入れ墨【写真8】）。日本にはあまりない光景じゃないですか。だいたい、お祭りで奉納相撲をすること自体が、もう日本ではあまりありませんよね。この奉納相撲のブラジル人の力士ですが、彼はなぜ「交通安全」って書いたかと聞いたら、彼は「トラックの運転手だから交通安全と入れた」とのことでした。しかも、日本語で。分かるような、分からないような、ブラジル人的なセンスですよ。でも、これは彫るべきだと、一生そのまま担いで行くべきだということになったようです。これは日本文化をいい風に思っているから、それが日常的にこのような光景が出てくるのだと思います。日本文化とブラジルの混ざり具合が、ここの移住地では強く感じると思いました。

### ●文化の混交としてのブラジル柔道

文化の混ざり具合が見えるという意味で、「柔道」というのも面白いスポーツです。ブラジルの柔道は、過去のオリンピックで18個もメダルを取っています。ブラジル全体のメダル数は102個しかありません。その内の18個（2割弱）を柔道が取っているわけです。柔道は日本移民が持ち込んだスポーツで、戦前は日本人しかやってなかったのですが、前後どんどんブラジル人の間に



写真 8=奉納相撲のひとつま

広がって行って、今では選手のほとんどがブラジル人で、オリンピックや世界選手権とかでブラジル人選手が活躍しています。

今は競技人口が50万と聞いています。ブラジルで日本語教育を受けている生徒は2万人しかいません。でも、柔道をやっているのは50万…。これは不思議な状態です。ブラジルにとっては3年後のリオ・オリンピックに向けて、柔道が確実にメダルを狙える競技として注目が高まっています。過去の実績があるからでしょうね。

## ●ブラジル柔道の初メダリスト、石井千秋

そんなブラジル柔道に、初のメダルをもたらしたのが戦後移民の石井千秋さん（帰化人）で、1972年のミュンヘンのオリンピックで銅メダルを取りました。そのときの話を石井さんに聞いたら、石井さんは「元々早稲田大学の柔道部員で、東京オリンピックのときに強化選手に入るか入らないかのぎりぎりのところで落とされた」ということでした。それが悔しくて海外に出て、南米で武者修行した。「プロレスやら格闘技の道場に行って、道場破りみたいなことをしながら自分なりに柔道を磨いて、日本ではできない鍛錬をした」と言っていました。

ブラジルに移住後、ブラジル柔道連盟から帰化してオリンピックに出ないかという誘いがきたとき、「もう一度やってみよう」という気になって挑戦したと言います。当時1972年は1番金メダルに近いといわれたのは、日本の笹原富雄選手。有名でしたが彼が2回戦で敗れるという大盤狂わせになりました。そのときもう一人のジャポネーズ、日本人がいるという話で、急に国際メディアから石井さんに注目が集まったらしいです。それまでのブラジルのメディアは、石井さんどころか「柔道」に関してすら、全然注目してなかったんです。だけど「どうも我々の国に強いやつがいるらしい」となり、「一体どんなやつなんだ」とって具合になりました。それで急にブラジルのメディアが選手の控え室に取材に来るようになったと、石井さんは驚いていました。

ブラジルの記者が控え室に取材に行ってみると、変な民俗音楽が流れていて、選手が外国の変な本を読んでいるんですね。ブラジルの有名な雑誌『ベージャ』が、当時、そんなことを書いたそうです。「あのとき何の音楽を聞いていたんですか」と聞いたら、美空ひばりの『柔』だとか。「読んでいた本は何ですか」と聞いたら、『竜馬がゆく』とか言っていました。それが、ブラジル代表で、しかもメダルを取るわけです。ブラジルという国の懐の深さを感じますね。

## ●国籍を超えた「Judo」の勝利

そのときのオリンピックで、ブラジルが獲得したメダルはたった「2つ」だけでした。そのうちのひとつが石井さんです。ですから、ブラジルにとって大きなメダルでした。今年（2013年）8月、リオで世界選手権がありましたが、あの時にも画期的なことがありました。21歳のラファエラ選手がブラジル女性柔道家初の金メダルを獲得したんです。世界選手権で初の金メダルです。これは9月1日の新聞ですが、その見出しが「世界王者が打ち勝った本当の敵は、貧困と自らの反抗的性格だった」とあります。これはすばらしい記事で、彼女が生まれ育ったのは『Cidade de Deus』（日本ではシティ・オブ・ゴッド）という名前のスラム街で、同名の映画の舞台になりました。スラム街の子どもたちがマフィアになっていく映画ですが、あの舞台となったリオ最大のファベラ（スラム街）出身です。彼女は小さいころから乱暴者で、道で喧嘩ばかりしていたそうです。どうやって扱ったらいいか誰も分からない。だったら格闘技をやらせたらいいって、たまたまそのスラム街の中のNPOがスポーツで柔道を教えていたんです。そこに預けられて、そこから彼女の柔道修行が始まります。下の記事にあります「この町に育った子どもは早くから、世界は不公平で残酷だと理解する。圧倒的な貧困等、麻薬密売人と警察との撃ち合いによる、雨のような銃弾と死、そんな日常で過ごす子どもにとって最大の夢はファベラを出ることだった」。

そんな記事です。そんな彼女が、柔道を始めてめきめき力を伸ばして2年前のロンドンオリンピックのときに日本人選手に負けて銀メダルでした。そのとき彼女に携帯にメールか何かで、ひどい中傷が来ました。「このメス猿め、お前のいるところは森の中だ、暈の上じゃない」。彼女のよう



な黒人系を中傷するひどい常套句が「サル」なんです。そんなメールが来たと書いてあります。そんな中傷を受けて彼女は落ち込みますが、その屈辱を跳ね除けるために「今回絶対金を取る」という意気込みで戦って取った金メダルだそうです。それで彼女は優勝したあとのコメントで、「肌の色やお金とは関係なく、誰でも自分の闘志次第で勝利はつかめる」と言って手を高々と上げたと書いてあります。

世界で最も不公平な町のひとつで育った子どもが、柔道によって精神と体を鍛えて世界一になった。これは国籍を超えた「Judo」という“道”の勝利じゃないかという気がします。ブラジル社会の1番脆弱な部分を、日本のスポーツ哲学が補完して、逆に世界に誇る存在にしたわけです。ブラジル文化を日本的な哲学（スポーツ）が補完して、世界一になった。これは一種の日本の勝利だと誇っていいと思います。

### ●日本と世界をつなぐ戦略的なパートナーとしてのブラジル

ブラジル柔道連盟の役員はほとんどブラジル人で、指導者レベルにはまだ日系人が多い、でも選手はほとんどブラジル人です。本来はブラジル柔道連盟が直接に日本の柔道連盟と連絡をとりたいが、なかなか意思の疎通がうまく行かない。それで結局、日本の柔道連盟との連絡は、講道館有段者会という一世が中心になった団体が担うことで、すみわけをしている。

世界柔道連盟は元々イギリスの柔道連盟とフランスの柔道連盟が中心になったヨーロッパ柔道連盟というのが母体になっていると聞いています。だから、西洋的に理解した柔道が世界柔道連盟のベースをなす流れになっており、日本の柔道の考え方が通用しづらい形になってきている。その中でブラジルの柔道関係者が言っているのは、ブラジル柔道連盟の会長を、世界柔道連盟の会長に押し上げることはできないだろうかということです。

ブラジル柔道は日本の柔道に近いといわれています。元々移住者が始めたので、ヨーロッパに比べるとスタイルは日本的です。ブラジル柔道連盟が世界柔道連盟の中でもっと力を持つという形で、結果的に日本の柔道の哲学を今より世界に広めて、影響力を持つことができないかということです。一つのアイデアとして向こうで言われています。

たとえば地デジの日本方式をブラジルが世界に先駆けて採用して、今では南米ではほぼ日本方式が南米諸国の標準です。今後、それをアフリカに持って行くようにブラジル外務省が働きかけています。日本の技術を、日本が世界に直接広めようとしてもうまく行かないことがある。そんな時、ブラジルは戦略的なパートナーになりえる立場かなという気がします。

### ●社会的弱者が逃げ込む世界的な避難所としてのブラジル

日本とブラジルが関係を深めつつあるという中で、大宅壮一の1954年の講演で面白いと思う一言がありますが、『大体に、ブラジルに来ている人種は、欧州でも、一風変わった地域で、最も封建的な気風の強い国から来ていることが分かりました。（中略）現在のブラジルには欧州の中世紀が残っているということになり、欧州人で中世紀がみたければ、ブラジルに観光旅行するがよい、と言うことになります』と書いています。

これは日系社会に関して、『明治の日本を見てればブラジルに行け』と書いているのと対応する言葉で、ヨーロッパ移民も同じだということを、彼はこの時点で見抜いています。封建的な気風が強いところというのは、おそらく社会的に最も抑圧された地域や階層ほど、早く大量に外国に移住

するという傾向のことを言っていると思います。「旧大陸の封建社会で最もゆがみが集中した社会的な弱者、強く押し出された人ほど早く、多くブラジルに来て、ブラジルでは早く地歩を占めた」という傾向だと思います。

旧世界（ヨーロッパやアジアなど）から社会的弱者が逃げ込むという、世界的な避難場所みたいな部分が新大陸にはあると思います。世界史的な流れは、そんな風に機能しているのかなという気がします。実際日本でも、沖縄県人とか、米騒動や関東大震災、昭和大恐慌といわれる中で押し出された人が、一早くブラジルに来ました。

そしてこの流れは今でも続いていると、この記事を見ながら思いました。2012年1月12日のエスタード紙ですが、ハイチ難民です。大震災で苦しんだハイチ難民が、全く祖国の復興が進まない中で、ペルー経由でアマゾン上流から密入国して、“約束の地”サンパウロ市へ来ているという記事です。彼らが記事の中で目指していく目的の地が、実はサンパウロ市のリベルダーデ区、つまり東洋街の一角にあるコンデ・デ・サルゼーダス街です。これは戦前に日本移民が最初に日本人街を作った場所です。100年たった今でも、ハイチ難民はそこを目指して来ている。都市の地域的な特徴として、「駅に近くて交通の便はいいが、傾斜地で土地が良くない下町」というその地域は、昔からその都市に来た新来者がまず旅装を解く拠点だったんですね。僕もすぐそばに住んでいますが、近くの青空市に毎週日曜日に行くとハイチの人たちがいっぱいいます。ポルトガル語をしゃべらない黒人はほとんどそうだと思います。いまでもこの地域はそういう役割を果たしていると感じます。

## ●沖縄からの移民

振り返って日本を考えると、日本において社会のゆがみが最も集中した地域のひとつが沖縄ではないでしょうか。ペルーやアルゼンチンとかは現地の中の日系人の9割が沖縄系の人でした。圧倒的に多いです。計算したら、沖縄の人口は日本の人口の1%くらいですが、海外の日系人の16%を占めるのです。それだけ沖縄を抜け出して海外に出る、活路を海外に見出すという動きが強かった。近代の日本の歴史的なゆがみがこの地方に集中したということの裏返しですが、その比率に反映していると思います。

この大学の多文化共生プロジェクトの実行委員長の宮城ユキミさんもルーツは沖縄県。沖縄県の方が、ブラジルに移住して、周り巡って、日本の浜松に戻って来たという流れが、できているのかなあとしみじみ思いました。この写真にある上原幸啓（う



写真9=上原幸啓さん

えはら こうけい)さんは那覇市の小禄出身ですが、ブラジル日本百周年記念協会の理事長をされていました

【写真9】。2008年の移民百年祭のコミュニティー代表です。彼は小禄（おろく）という字の出身です。小禄出身の方はウルクンチュウと言います。市でもなく、町でもなく、村でもなく字です。いわば、一つの通りですが、その通りからどれくらいブラジルに来たかという、なんと4000人というのです。静岡県人が戦前に来たのが大体4000人です。それに匹敵する数が、沖縄のひとつの字から来ています。

「なぜそんなに来ているんだろう」と思って、上原さんに聞いたらこんなことを言いました。「僕は移民しなかったら、きっと戦争で死んでいましたよ。小学校のときの同級生、80人の内、戦後生き残ったのは12人だけでした。残りはみんな戦死しました」。上原さんは9歳でブラジルに移住していますから、戦前です。小禄ってというのはどんな場所かと思って、実際に行ってきました。前が当時の軍港で、後ろが海軍の司令部、横が空軍基地でした。つまり日本の軍事的要衝のど真ん中に位置していました。だから、「1平米に2つくらい爆弾が落ちた」と上原さんは言っていました。それくらい当時は、米軍の猛烈な艦砲射撃を受けた地域だったそうです。上原さんは「お父さんと、妹が沖縄に残ったが、戦争中に防空壕に隠れていたのに爆撃で死んだ」そうです。

「何でお父さんは那覇に残って、子どもだけブラジルに来たんだろう」と変だと思って尋ねたら、「オバアがそう言った」と言うんです。オバアの兄弟が、戦前にアメリカに移住していました。それで、「戦争になったら、沖縄が真っ先に米軍に狙われる。そうなったら沖縄は最後だ」ということをオバアが繰り返し言っていたそうです。「上原家の血を絶やすな」「ブラジルに行け」とオバアが強く勧めたので、父は仕方なく子どもだけを渡伯させたそうです。

オバアの情報と判断は正しかったということが戦後証明された、という悲しい歴史があるんだと思いました。上原さんはサンパウロ州立総合大学工学部を卒業して、そのままその教授になって半世紀そこで教え続けました。教え子の中にはサンパウロ市長など有名な人がいっぱい出ています。

2年前に世界ウチナーンチュ大会があつて、そのときの琉球新報の閉幕式のときの記事ですが、見開きでこの写真です【写真10】。スポーツ紙かと思いましたが、琉球新報、沖縄タイムスの扱いがすごいです。地方都市の盛り上げ方は半端じゃありません。これが終わって、静岡に帰ってきたらうちの家族は、「そんなことあったのか」みたいに、誰も知りませんでした。沖縄と内地（本土）の温度差は今でもあると感じました。

### ●イタリア移民と労働運動

抑圧された層が早くブラジルに来ているという流れは、日本だけでなくイタリアでも一緒です。1882年にイタリアが大水害に見舞われて、そのときから1900年までに100万人のイタリア人がブラジルに移住しています。これが「イタリア人の団塊世代」だったわけですが、1860年くらいにイタリアは統一されたばかりで、この時代はイタリア人としてのアイデンティティーをようやく作り始めていた時代。まだそれぞれの地域、地域の風土やアイデンティティーが強かった時代。統一されて産業革命が始まって、工場労働者が増えて組合活動が盛んになる流れの中で、イタリアでは組合活動をやっている人たちがたくさんいました。そんな人たちがブラジルにも来て、イタリア語の新聞を作るんです。当時、サンパウロだけでイタリア語の新聞が60紙もあったそうですが、その大半が組合運動とか、アナーキズムとか、共産主義の新聞だったんです。



写真 10＝琉球新報

そういう虐げられた層が中心になって来ていますから、そういう主義主張を伝えた新聞ができました。これは本国にも送られて、左派でなおかつナショナリズム的な考え方を海外から主張した。こんな流れの中で、ブラジルは親ムッソリーニ、親ナチスで、労働運動に理解のある国になって、戦前のゼツリオ・バルガス政権っていうのは先進的な労働組合法とかを制定しました。この左派の流れが強まって現在の大統領、労働者党の政権にはイタリア系の子孫の政治家が今でも多いです。

思えば静岡県人会の初代会長の松本圭一も労働者代表として国際会議に出席し、平井格次も洗濯屋組合のボスとなり、労農党代議士だった山崎劔二もブラジルに来ました。虐げられた側に立った人間と虐げられた側そのものが大量に渡ったのかなと思います。ジルマ大統領、現在のブラジルの大統領も、父親はブルガリアの共産党の弁護士だったそうです。党と考え方が変わってきたということで党から追われて1929年、平井格次がブラジルに来たところにブラジルにやってきました。父親自身も左派主張を持っていた方で、ジルマ本人も軍政時代に学生運動に加わり、過激派の一員として政治警察に捕まった経歴を持ちます。

### ●これからのブラジルと日系人コミュニティ

ヨーロッパなどの「旧世界」の裏返した縮図というか、世界中の社会の弱い部分が凝縮して作られた新しい社会ブラジルが、この10年くらいで「世界の成長センター」と呼ばれるようになりました。ある意味、100年たって世界がひっくり返り始めた気がします。強い人たちが作った社会と弱い人たちが集まった社会が拮抗してきたという、不思議な流れが起きている感じです。

移民を通して日本も、そんなブラジルに深く関係しています。リーマンショックまでは世界の需要に引っ張られる形でブラジルは成長していましたが、リーマンショックで輸出が鈍り、国内需要を拡大することで成長を維持しなければならなくなって、急に成長が鈍りました。インフラがないので、成長する土台がないのです。その辺が日本から見ると、投資する余地がある部分だと思います。

西洋の社会の一部にあるブラジルの日系人コミュニティというのは、外国の中に生まれた自立的な日本文化発信拠点だと思います。そこでブラジルの文化になじみやすいように変質した「日系文化」が——レジストロの灯籠流しとかが日系文化の一つだと思いますが——ブラジルを通過して西洋社会に紹介されていくというのが、これからどんどん起きてくると思います。

今の世界のあり方を日本的な良さをもって補完するのが、日本の役割だと思います。でも、いくら日本が世界に向かって直接「こうすべき、このようにした方がいい」と言っても、その価値観を西洋社会や世界の国々はなかなか理解してくれません。そんなとき、日本以外の国が、その主張を西洋風に適応して広めてくれれば、もっとその主張が通り易いことは間違いないですね。ブラジル日系社会が「日系文化」として広めているものは、それではないかと思います。日本文化を西洋に広めるための一つの実験といえないでしょうか。つまり、私の大先輩である吉田前編集長が言っていた「移住は壮大な民族的な実験だ」という言葉そのものだと思います。ご清聴、ありがとうございました。

## ●質疑応答

**司会者** 日本からの移民は沖縄とか九州の出身者が多いので、一般的にはその人たちの話が多いですが、今日は深沢さんが沼津市出身ということで、静岡県出身の移民の先駆者たちをご紹介いただきました。私も平野運平については調べたり読んだりしたことありますが、そのほかの方々は今日初めて知りました。いろいろな人の歴史、営みの上にブラジルの日系社会ができてきているのだなと感じました。後半のところでは大きな視野で日系人コミュニティのことを位置付けることができました。特に最後の、ブラジルはいろいろな国の労働者あるいは底辺の人たちが集まってきた、左翼的な運動にもとても理解がある国だったことは、言われてみるとなるほどというところですよ。

それではここから質疑応答に移ります。

**質問者 1** 私は磐田で日系人、ブラジル人と接触があります。入管法も20年くらいたっていますが、まだ多文化共生といっても、ブラジル人コミュニティ、日本人コミュニティを作っているだけではないかと思います。結婚などはまだないんじゃないかと思いますが、100年前にブラジルに行った日本人たちは結婚とか家庭を持つというのはどういう風にしていたのでしょうか。日系人の中で結婚を繰り返していたのか、それとももっとサラダボールみたいに混じって融和しているのか、まだまだ日系人社会の中で生活が営まれているのか、近い将来それがどうなるかということを知りたいです。

**深沢** 二世になると混血率がどれくらいになって、三世だとどれくらいだという数字はサンパウロの人文科学研究所が出しています。確か三世になると半数は混血なんです。最初の頃、一世の親は混血しないように子どもに教えました。ブラジルという文化風土は、容赦なく、貪欲に異物を吸収するんですね。最初は住み分けしていますが、子供が学校に入って以降、どんどん混ざっていき、結果的にブラジル社会の中で二世、三世が活躍していきました。ですから、どんどん混血していきます。ブラジル社会の中でコミュニティを作っていると言っても、「コミュニティ自体」が丸ごとどんどんブラジル化していくわけです。でもそれは自然ななり行きだと思います。その中で「いかに日本人的な、日系人的な特性を残していけるか」という議論は今でもあちこちでされています。そのおかげで、多少なりとも日系人意識は残っていると思います。特にサンパウロ州のような日系人集住地区には意識がある人はまだいっぱいいます。「混血しながら、それに合わせてコミュニティを変質させて継続している」という感じでしょうか。

**質問者 2** 一般的なことです。先ほどの経済的変革のとき、ヨーロッパ大陸での宗教とか階級闘争に敗れたものが移住するという歴史があると思いますが、日本人の移民は基本的には一旗上げよう、それで財を成したら帰ってきて故郷に錦を飾ろうというのが基本であって、それがあつた意味では、明治気質かも知れませんが、だから結果的に日本文化を残していたので、太田や浜松で労働者を使うときに、これは日本人として扱えばいい、単純労働もOKだという風に流れていくという風に読みました。最初の一世代の方は、一旗組が現実的に多かったんでしょうか。

**深沢** 戦前の移住者の9割は「いつか日本に戻ろう」と思っていました。ブラジルでお金を儲けて5年、10年、長くても15年したら日本に帰りたいと思ってブラジルに働きに来たんですが、実

際来て見たらそんなにお金が儲からない。「移民会社の宣伝にだまされた」という状況が多かったわけです。というか、大半がそうだったわけです。「まだお金が貯まらない」と言っている間に、子どもはどんどん成長してしまい、気がついたら日本は満州事変、太平洋戦争という状態になって帰れなくなってしまった。

それでも親世代は「いつか日本に帰るんだから、お前たちはしっかり日本語を勉強しとけ」と二世の人たちに言って教えました。「お前たちはブラジルに生まれ育っているけど、日本人だから日本に帰って恥ずかしくないような教育を受けさせなければ」と親は言っていました。だから親は戦争中もブラジル政府に隠れて一生懸命に日本語学校を開いて教えてきました。ブラジル政府が1942年1月に日本と国交を断絶して、公の場での日本語の使用を禁止しました。日本語学校は全部閉鎖され、邦字紙も全部閉鎖させられました。日本移民は「日本はどうなっているのか」という情報を得る手段がなかったんです。唯一の日本語メディアは、当時の短波ラジオの東京放送でした。それだけは聞こえてきて、大本営の発表では、日本は調子がいいらしい、これは行けるぞ、日本は勝つに違いないと、ブラジル移民の大半が思っていました。

だから、1945年8月15日に天皇陛下が玉音放送をされて、突然日本は負けましたとなったとき、大半の移民は信じられなかったのです。「昨日まで大本営は勝つと言ってたはずじゃないかと。今更、急に負けたってことがありえるのか」という心境で、それを納得するまで10年近くかかりました。その間に子どもはどんどん大きくなってしまいました。親（一世）は「日本には帰れない、日本の故郷に帰れる場所はない、負けた日本に我々が戻れる場所はない」と思い、子どもたち（二世）に対して「お前たちはブラジルで育ったんだから二世だ。お前たちはこれからブラジル人として生きよ」と言い始めました。子どもたちにすれば、昨日までは「日本人」と言われたのに、今日からは「二世、ブラジル人」だと言われても、そんな急な切り換えができるはずはない。そこで明治の精神を残した二世がいっぱい育ちました。二世というのは、実に難しい世代です。

だけどそこで切り替えて、ブラジル社会の中に入っていった二世もいっぱいいます。いろんな二世がいました。日系社会の中に居場所を求める人もいれば、ブラジル社会の中に入って行って居場所を求める人もいました。その中で、最初に日本に働きに来た層は戦後移民で、沖縄海洋博とか、ああいうときの現場工事に来るような話でした。戦後移民が筋道をつけて、そこから自分の子どもたち、親戚の子どもたちに広げて行って、1980年代中ごろから二世の人たちがいっぱい来るようになって、1990年には入管法が改正されるという流れでデカセギブームになりました。

ですから、最初はコミュニティの中心部分である一世層からデカセギが始まって、二世に広がる流れです。その人たちは日本に来て3年とか5年してある程度お金を貯めたら、多くの人がブラジルに帰ってしまいました。でも日本の方から「もっと送れ」と言ってきます。そうするとリクルーターたちは次の働き手をコミュニティの中心部から外側の方へ探しに行ったんです。そうすると150万人の日系人の中で、たとえば日本に常時25万人来ているとすれば、それは毎年何万人ずつ入れ替わっているわけです。中心的なコロニアからの50万人はあつという間に人材が枯渇してしまうわけです。

1990年代の後半ぐらいから、コロニアの外側の100万人、日系人だけでも日本の知識がない、日系人としての意識がない人まで動員しないと足りないという事態になりました。次第にコミュニティ内の外周部の人々が来るようになって、顔はいわゆる日系だけでも、意識は普通のブラジル

人という層が中心になってきています。どんどの外側の層へ、でもビザの関係で「三世とその配偶者」が限界です。そこで、ギャップが生まれます。ブラジル側のコミュニティを見ると、日系活動に参加している人は日本文化が大好きで日本語もある程度しゃべる中流階級以上の人です。つまり、デカセギをする必要がない人たちです。あくまで一般論ですが、日本の景気が90年代後半から不況になって賃金が低迷していることもあって、その状況の中で、なお日本に来たいと思う層は、結果的により下層の人たちに移り変わる下向きの循環が起きていた感じです。当然、この傾向から外れる、純粹に日本を知りたい、ルーツを知りたいという層もいます。

このような流れの中で、ブラジル側と日本側で、同じ日系人でも印象が違うことが起きているのではと思います。ブラジルのコロニアは「日本文化大好き」「日本寄り」、日本のブラジル人コミュニティは「ブラジル文化大好き」「ブラジル寄り」と両極化している印象があります。ですから、ご質問のような、今の在日ブラジル人一世層を「日本人」的にイメージすること自体、少々無理があるかもしれません。ただし、在日ブラジル人二世、日本で生まれ育った在日ブラジル人はかなり日本人的になっています。ブラジルの二世もまったく同様ですが、同じ在日ブラジル人でも在日一世と二世では違う傾向を持つ、まったく区別して考えた方が良いケースかと思います。

今回帰国支援で帰った人たちの再来日が10月15日に解禁されるということで、いっぱい日本に帰ってくるかどうかという話ですが、私自身の想像ですけど、1年間の雇用契約が必要だという条件が付いている限りどーんと帰ってくるということはありませんだろうと考えています。ブラジル側に来ている求人情報で、1年間の雇用はほとんどないと思います。それを知ってそういう条件を付けたと思います。形だけ解禁にしたけど、実際ほぼ変わらないんじゃないかという気がします。僕ら邦字紙の立場からすると、今回帰国支援を受けて帰ってきた方の中には、もう日本に戻らないほうがいいんじゃないかって思える方も多くて、彼らはブラジルでがんばった方がいいんじゃないかという気がします。帰国支援で帰った人はブラジルにとどまって、まずは日本に残った人が中心になって日本側のコミュニティの結束と評価をより固めてほしいという気がします。

**司会者** 今の質問との兼ね合いで私から追加の質問です。浜松で今年あった出来事をめぐってお聞きします。ある若い夫婦の夫の方は家族の自費で一旦ブラジルに帰国しました。ブラジルで結婚した奥さんは国の帰国支援を得てブラジルに戻った人で、まず夫が先に再来日して奥さんを日本に呼び寄せようと思ったら、奥さんは帰国支援で帰った家族ということで呼び寄せは認められなくなった。結果的に訴訟になる寸前で入管当局が判断を変えて、結婚という事実を根拠に在留資格申請が通ったんですけど、ブラジル国内ではあれはどのように評価されているのですか。ブラジル国内では帰国支援の制限の目処とされた3年が経過したあたりの時期、あるいはそれ以前から何か動きがあったのでしょうか。ブラジルにいる立場としてお話しください。

**深沢** 帰国支援の問題で、3年たった時点でコミュニティのいろんな人から問い合わせを受けましたけど、大半は出稼ぎの送り出し会社（派遣業者）からで、「そろそろ日本に送りたいけどどうだろう」みたいな問い合わせでした。たとえば帰国支援を得て帰国した本人たちから、解禁を働きかけるような署名活動などして総領事館に持っていくなどの動きはなかったです。2008年の暮れから現在（2013年10月）までに大体11万人がブラジルに戻ってきました。それまで31万

人いたのが20万弱になった。4年間で11万人が日伯間で動くというのは、移民史上未曾有の民族移動みたいな状態です。ですが、帰国支援を受けて帰ってきた本人たちプラス、それに同調する人たちによる、再来日制限解除を求めるような動きは聞いてないです。単発としてそういう動きはあったでしょうし、今回の裁判になりかけたというのもそういうことだったと思いますが、まとまった形で「早く解除して」という動きは僕が知る限りなかったです。

**司会者** 帰国支援がらみのことで質問はありますか。

**質問者3** 公立小学校で外国籍児童の教育に当たっている立場の者です。そういう関係で日本経済とブラジルの経済のバランスについて意識していますが、リーマンショックと東日本大震災で、日本から見ればプッシュ要因で、ワールドカップとオリンピックの開催が決まることでプル要因が合致してから3分の1くらいの日系ブラジル人がブラジルに渡ったことになると思いますが、その現象がポロロッカ現象（アマゾン川の逆流現象）と現地では言われているようですが、日本で技術を身に付けた一部の人たちが活躍してるとかって言う、ニュースでも紹介されていました。そうした動きが、ワールドカップやオリンピックの開催までは私は続くと思ってましたが、最近NHKのニュースで立て続けに、ブラジル経済の変調というか、アメリカの金融引き締めに関係して流れ込んでいたお金が引き上げられて、難しい状況になってるとということが放送されてショックを受けています。ですけど、となるとブラジル経済が変調を来たして経済が低下するとなるとプッシュ要因になって、日本はオリンピック開催が決まってアベノミクスで経済が好転し始めてるとなると、かなり日本への労働力が移入する流れにつながっていくかもしれない。ただ、1年の労働許可を取るのに非常に難しいとなるとそれが妨げになるかもしれませんが、要素としてブラジルから日本への労働力移入がまた元へ戻ってくるような流れになるんじゃないかと感じるんですがどうですか。

**深沢** ブラジルの側から日本に来たい層は今もたくさんいるでしょう。行けるかどうかは別ですが、たくさんいると思います。ただ日本側で仕事がないというので、普通は派遣会社が仲介して仕事を紹介してという形が多いですが、最近はずでに日本に家族の誰かがいる、もしくは親戚の内のだれかがいるという家庭が大半なので、その人たち伝いに直接行くケースが多いです。そのケースを通してでもなかなか仕事がないのが現在の状態だと思います。でも仕事が出てくると、家族や親戚経由の情報で「仕事が出てきたからおいでよ」という話になれば、また来ると思います。ブラジル経済に関しては2年前（2011年）の9月から金利政策が大きく変わりましたが、あのころには既に変調が始まっていました。今年（2013年）4月からそれが特に大きく現れてインフレが非常に上がってきました。僕がブラジルに来た1992年は年率2000%のハイパーインフレ時代で、朝にタバコを1箱買って夕方買うと値段が違うみたいなそんな時代でした。その時代に痛い思いをした国民の記憶は今も鮮明ですから、ちょっとでもインフレがひどくなると国民は過剰反応します。

それが今年（2013年）6月の大規模な100万人規模の抗議行動に発展しました。2008年までは自立的にブラジル経済が拡大していったというわけではなく、元々リーマンショックまではヨーロッパやアメリカがたくさん買ってくれるというのに支えられてブラジル経済が拡大していた部分は大きいです。それがリーマンショック後は、国内の内需で拡大を続けようと政府が方針を変えましたが、国内の賃金を上げたり金融の金利を下げたりいろいろしましたが、それも成長の限界



に達したのが現状です。

国民にお金を貸し付けたりとかして、それも返せないくらい国民が借り始めたという状態でこれ以上貸したらまずいというところで、打つ手がなくなってきているのが今年の状況です。ですから変調自体はもう何年か前から始まっていたことです。今の政権からすると、「来年のワールドカップ、3年後のオリンピックまで持つぞ」と言う風に、常に強気に言っていたわけです。だけど、実際かなり息切れしています。おそらくそれを期待して日本からブラジルに戻った人たちもいっぱいいると思うんですが、その人たちがいい仕事に就けるかというところが難しいでしょう。とりあえず、生活するために働いている人が大半で、ブラジルでの今の仕事に満足している人は少ないと思います。やっぱり、「日本でいい仕事が出てきたらまた行きたい」という、いわば待機状態の人が数万人といるだろうと思います。その間に子どもは成長するので、子供がブラジルから動きたくないとなってくれば、親の考え方も変わる。この待機期間がどれくらい続くかによって、それもまた変わってくるでしょう。それに四世以降にはビザは出ませんから、三世の人たちがその中で時間がたっていくと基本的に行きづらくなるだろうと思います。だって、日本に行って50歳で仕事があるかといったらあまりない。となってくればその辺は時間との戦いというか、そういう展開になるのかなという気がします。

**司会者** 今日私のゼミの学生をはじめ、学生たちも何人かいるので学生の中で質問ありますか。私のゼミの中には1年間ブラジルに行っていた人もいるし、この国で育った日系ブラジル人の学生もいます。今日来ている中にはこの夏2ヶ月ブラジルに行っていて日系人コミュニティのど真ん中で日本語を教えてきたという学生もいます。今の3人はそれぞれ違う視点でブラジルを見てるんだと思うけれど、どうですか。

**質問者4（岡崎）** 3世の岡崎ケンジです。質問はありませんが、今日話を聞いて自分の中では新しい情報ばかりで、そうだったんだって思ってたのに、という情報が多くあって整理できない感じです。

**深沢** 自分の中ではこう思ってたけど、今日聞いた話と違うぞというというのはどういうところでしたか？

**質問者4（岡崎）** たとえば一番面白かったのが、レジストロというところで鳥居の向こうにカトリック教会があるという時点で、そんなところあったかと思ったし、日本にいるブラジル人はそんなに鳥居とか日本文化、日本の物に対してそんなに敏感じゃないというか、自分に取り入れてないというか、こっちに住む人はブラジルの文化をそのまま持ってきて、ここでそのまま行ってるイメージが僕にはあったので、融合して文化を取り入れていることが僕にはすごく新しかったです。

**深沢** ブラジルに鳥居がいくつくらいあるだろうと思って個人的にいろいろと調べているんですけどもね。岡崎君。いくつあると思いますか。

**質問者4（岡崎）** 100。

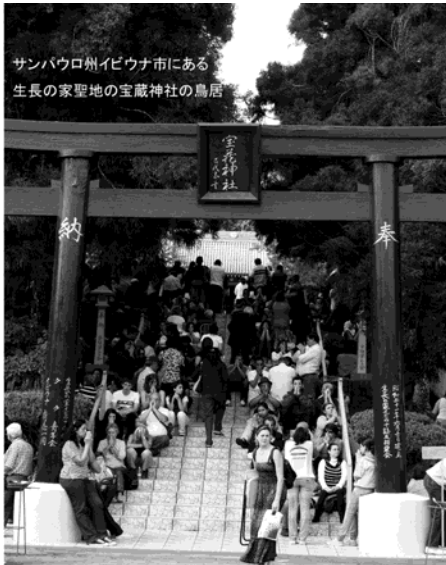


写真 11=ブラジル生長の家  
イビウナ聖地の鳥居

深沢 どんぴしゃだね。実はブラジルは「知られざる鳥居大国」なんですね。日本以外で一番鳥居があるのはブラジルじゃないかと思います。ほかにもあるかもしれませんが、これをご覧ください【写真11】。生長の家はブラジルに広まっています。生長の家はブラジルに広まっています。生長の家はブラジルに広まっています。これはそのイビウナ聖地の大鳥居です。それ以外にもアマゾナス州のパリンチンス。最初戦前にジュートというのが入って黄色い麻を育てたところですが、ここにもこういう鳥居が建てられました。これはサンジョゼ・ドス・カンポスというところの日本公園にある鋼鉄製の鳥居です【写真12】。中は中空になっていて、階段で中を上って上の方とか掃除できるそうです。これを設計したのは、サンジョゼ・ドス・カンポスの空軍設計センターの技師です。上司に特別な許可を得て、仕事中に鳥居の設計図を書いて、空軍が使う特別な鉄鋼らしいですが、そ

それを調達して作った。この形の鳥居のデザインは、カッコ良くないですか。日本にありますか。

こっちの写真は、サンパウロ市郊外のモジ・ダス・クルーズス市にある、4車線の道路を跨いで建てられた鳥居です【写真13】。2008年の移民100周年の時にできました。これは実は最近、撤去されて、同じ市内の百周年記念公園の中に移設されてしまったんです。ブラジルでは今、キリスト教の新教、プロテスタントの人たちが増えていて、プロテスタント派の議員もいます。当時日系市長がこの鳥居を作ったのですが、プロテスタント議員が「鳥居は神道の物だから、自分たちはそんな場所を通れない」とか言い出して、ちょっとした騒ぎになったことがありました。ブラジルでは鳥居は宗教から離れた存在なんですけど、「社のない鳥居」というものがまだ理解されている途中なんですね。



写真 12=サンジョゼ・ドス・カンポス市の  
日本公園の鳥居



阿部順二市長(2008年当時)がモジ市に入り口に作った鳥居



写真 14=2008 年のサンパチーム  
「ヴィラ・マリア」の先頭山車

かつて、終戦後に「勝ち負け抗争」という、日本人同士で殺し合いまでした時代があって、二世の人たちが日本文化から離れていった時代があります。都会の二世には、日本文化を勉強することや日本語を勉強することは恥ずかしいことだ、自分たちはブラジル人として生きていかなければいけない、と強く感じる時代がありました。そういう時代に、まさかブラジルで日の丸を掲げるわけにはいかない。でも、なにか自分たちのシンボルがほしい、という欲求が生まれ、日本的なものを象徴する存在として、「社

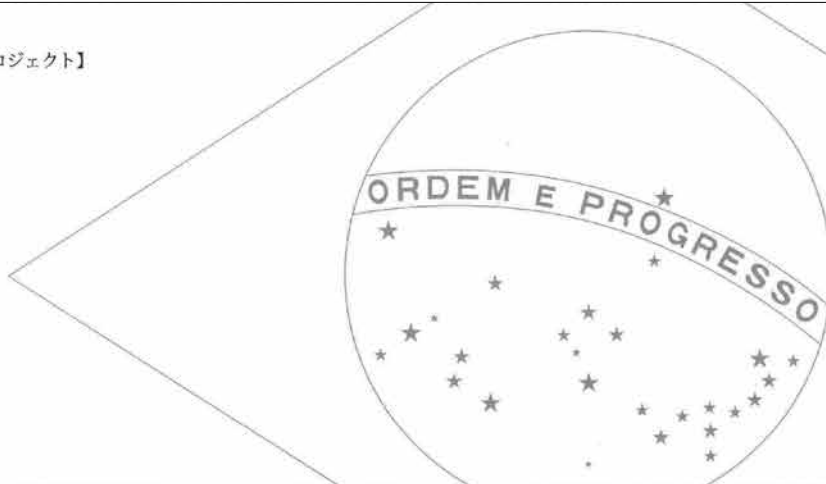
なき鳥居」というものが生まれたのだと思います。

それが1974年にリベルダーデという東洋街のど真ん中に鳥居が建ちました。これは最初から社がなかったんです。作った当時は一世の人たちが、みんな反対しました。「社がなくて鳥居だけ作るのはどういうことだ」と。中華街の中華門と鳥居は違うぞと反対したけど作ったんです。でも東洋街で日系のイベント（七夕祭りや年末の餅つきなど）をやると、ブラジルの最大の放送局グローボというのがありますが、毎回取材に来てくれて、それを全国に放送してくれます。そのとき必ず鳥居が映されるんです。そうすると日系人＝鳥居というイメージがブラジル全体に広まって行って、日系人自身も「俺たちのシンボルは鳥居だ」というイメージが定着したのだと思います。これが1990年以降にどんどん増えて、100周年前後に一気に増殖して100基になったという感じでした。

これが2008年のサンバのカーニバルのときの写真ですが、よく分からない鳥居がパレードの山車の上に作られて堂々で行進しています【写真14】。サンバというのは元々黒人音楽に由来とする民族的な文化です。いわばブラジル人の根幹の部分にある保守的な層、どちらかというと貧困層が多いですが、そんな国民が愛好する音楽文化に、100年経って日本移民がようやく仲間として認められたというシンボルがこのパレードなわけです。この光景を見ながら、異文化を一番受け入れにくい、もっとも保守的な庶民の人たちが、初めて日本文化を自分たちの伝統に取り入れてくれた感動的な瞬間だと僕は思いました。移民100周年で「一緒に祝おうよ」と言ってやってくれたパレードの先頭に鳥居があるというのは、それだけ鳥居の存在感がブラジルで定着した証拠だと思います。ブラジルの鳥居は面白いので、ぜひ見に来てください。

**司会者** 2008年のある雑誌で、深沢さんも寄稿されて私も寄稿しましたが、そこでたしか鳥居の話があったのを思い出しました。特別講演会はここまでとします。皆様、ご来場ありがとうございました。

【SUAC多文化プロジェクト】



# 特別講演会

# ブラジルの日本語メディアから見た

# 日系人社会

2013年10月11日(金)

15:00 ~ 17:00

参加無料  
申込不要

静岡文化芸術大学 南281中講義室

対象：多文化共生に関心のある市民（参加可能人数150名）



講師 深沢正雪氏  
ニッケイ新聞編集長

### <深沢正雪氏プロフィール>

1965年、静岡県沼津市生まれ。ブラジル・サンパウロ在住。92年にブラジルに初渡航し、邦字紙パウリスタ新聞で研修記者。95年にいったん帰国し、群馬県大泉町でブラジル人と共に工場労働を体験、その知見をまとめた『パラレル・ワールド』（潮出版）が99年の蒲ノンフィクション賞を受賞。

このほか共著・編著多数。99年から再渡伯。01年からニッケイ新聞に勤務、04年から編集長。静岡新聞『時評』欄の寄稿も好評。



### お問い合わせ

静岡文化芸術大学  
〒430-8533 浜松市中区中央二丁目1番1号  
Tel. 053-457-6111 (代) Fax. 053-457-6123 (代表)  
文化政策学部 国際文化学科 池上研究室  
Tel. 053-457-6156 E-mail: ikegami@suac.ac.jp

### アクセス

- 徒歩 JR浜松駅から徒歩15分
- バス 浜松駅北口バスターミナル  
10番のりば「文化芸術大学」下車  
※系統番号70番「子安・笠井」行きを除きます。
- 12番のりば「循環まちバスく・る・る東ループ「文化芸術大」下車  
【駐車場はございません。公共交通機関をご利用ください。】



主催/静岡文化芸術大学、日伯交流協会

後援/浜松市、浜松市教育委員会、静岡県、在浜松ブラジル総領事館、公益財団法人浜松国際交流協会（HICE）

本講演会は、2013年度静岡文化芸術大学イベント・シンポジウム開催費「お芝居出前プロジェクト寄せ書き展示」及び「はままつ多文化共生 MONTH 事業」の一部です。

## 日本文化、ブラジルに根付く

ニッケイ新聞  
編集長

深沢氏が浜松で講演



ブラジルのニッケイ 中区の静岡文化芸術系人社会」と題して講演した。今後、日本が世界にメッセージを発信する上でブラジルの日系人が重要な役割を果たすことを強調した。同主催の多文化プロジェクトの環境で、約50人が聴講した。

移民が果たした役割について解説した深沢さん。浜松市中区の静岡文化芸術大

た。深沢さんは、ブラジルへの移住が本格化した背景や、移民の中の静岡県人が果たした役割について説明。柔道や鳥居、灯籠流しなど、移民を通じてブラジルに根付いた日本文化を映像で紹介し、「日本のやり方を西洋に広めようとする時、ブラジルは戦略的パートナーになりうる」と指摘した。

また、日系人帰国支援事業利用者の再入国が「1年以上の雇用期間のある雇用契約書の提出」という条件付きで解禁になることについて、「条件をクリアするのは実質、難しい」とし、現実的な在り方として「(帰国せず)日本に適応した人を中心に、日本国内のコミュニティを強化するのがいいのでは」と持論を述べた。

2013.10.12  
静岡新聞

---

SUAC 多文化プロジェクト 特別講演会  
ブラジルの日本語メディアから見た日系人社会  
報告書

2014年2月 印刷発行

編集 池上重弘

発行 静岡文化芸術大学

430-8533 浜松市中区中央2丁目1-1  
TEL (053)457-6156  
FAX (053)457-6156  
E-mail: ikegami@suac.ac.jp

印刷 オオゼキ写真印刷株式会社  
433-8111 浜松市中区葵西2丁目5-20  
TEL (053)436-1956  
FAX (053)437-6095

---